

AAI News 第60号の発行を記念して

AAI News は1995年10月1日に創刊されました。そして12年と1カ月後の今月、こうして第60号が発行出来ますことを、社員一同大変うれしく思っています。同時に、ここまでこうしてやってくることが出来たのも、皆様方のご支援とご理解のお陰と深く感謝いたしております。

創刊のお知らせにも書いた通り、国際耕種の英語名である“Appropriate Agriculture International”の頭文字“AAI”と“Newsletter”の“N”を組み合わせた“AAIN”はアラビア語で「泉」や「目」を意味し、乾燥地で非常に大切な水や憩いの場であるオアシス等も連想される言葉です。そして、文字通り“AAIN”は我が社のオアシスとして、12年もの長きに渡り事務所には不在がちな社員に対して意見交換の場を提供し続けてきました。さらに、“AAIN”は我々の考え方を湧き出させる「泉」として、皆様からの反応を探る「目」として機能し続けてきたと思っています。これからも現地からの生の声を中心に、真に地域住民の役に立つ協力とは何かを模索し続ける我々の声をお届けしたいと考えています。今後とも、国際耕種をご支援頂けますよう心よりお願い申し上げます。

今回は AAI News 第60号の発行を記念して、最近の社員の様子をお知らせしたいと思います。



大沼洋康：2000年以降、タンザニアの全国灌漑マスタープラン、シリアの節水灌漑農業普及計画と連続して灌漑がらみの案件に参加しています。シリアの節水案件においては、以前個別専門家として同国普及局に派遣された時の経験や JICA 筑波における研修業務を通して得た経験等を生かす努力をしています。実際には、村落レベルで活躍する普及員に対する研修普及体制の確立を目指しつつ、そうした普及員を巻き込んだ形での近代灌漑技術の普及活動に取り組んでいます。



小野浩：2001年からスワジランドの灌漑改良拡張計画で入植地の経済社会調査と野菜展示園活動、入植地周辺サトウキビ栽培農家調査を担当しました。JICA 筑波では南部アフリカ地域特設野菜畑作技術と南アフリカ共和国別研修野菜栽培の両コース、現在は野菜栽培技術Ⅱコースを担当しています。これまでマスカット基金でジンバブエのローカル NGO と収入向上に取り組む、ボツワナの帰国研修員のその後の活動を調査しました。これからは帰国研修員を巻き込んだプログラムに取り組んでいきたいと思っています。



古賀直樹：2003年入社後、モンゴルの地方農牧業体制改善計画、シリアの節水灌漑普及計画、東ティモールの流域管理計画等の案件にかかわる機会をえました。森・草・水・土の対象のちがいはあれ、上記プロジェクトを底流する考えは「資源管理」。そのなかで現地住民の協力をいかにひきだしていくかが大切な視点ですが、言うは易し行なうは難しです。しかし難しさとともにやりがいを感じてきました。今後は長期的・持続的に通って取り組む相手を探したいと考えています。その解はアフリカかな？



小島伸幾：昨年（2006年）に入社以降、JICA 筑波の陸稲品種選定技術コースの研修指導、ウガンダ共和国のネリカ適応化計画短期専門家とネリカ稲に関わる案件に携わっており、入社以前の水稻栽培から陸稲栽培へと活動分野がシフトした感じがあります。しかし、種子生産と品種選定技術の向上、また、普及と研修という課題は共通しており、これまでの経験を活かしながら活動しています。今後は、アフリカでのネリカ普及に、陸稲品種選定技術コースの帰国研修員を活かして行きたいと考えています。



湖東朗：こここのところ何年間か、個別専門家派遣や技プロ（節水灌漑農業普及計画）でずっとシリアで仕事をしています。これらの業務を通して、普及員に対する研修による人材育成に関わってきました。今後こうした経験を他のプロジェクトや JICA 筑波における研修業務等にも生かしていきたいと思ます。一方、最近では「耕作放棄地拡大」や「食糧自給率の低下」等に代表されるような、日本の農業や農村の問題にも関心を向け始めています。



財津吉寿：今年までモーリタニアのオアシス開発調査に参加、現在は灌漑農業分野でのイラク支援業務に従事しています。専門はもともと土壤屋ですが、土壤から土地利用、土地利用から栽培関係、栽培関係から農村開発と職を求めて……。また、衛星画像解析、GISなどもかじっております。AAI ニュースを定期的に発行するのは大変ですが、不在がちな社員間の意見交換の場として、自分の勉強の場として活用しています。



長谷川繁弥：2000年から筑波国際センターで野菜栽培技術研修指導を始め、90人近くの研修員に接してきた。来日時のお互い手探りの状況から帰国前の報告書作成発表過程で一体感を感じる業務に満足している。研修員が同じように達成感を感じる頻度を高める研修手法の確立が課題と思っている。さらにこれまでの経験を栽培技術指導雛形としてまとめるのが次の課題である。また帰国研修員のフォローアップをする時期かなとも考えている。